近世小菅村の市立てと商人・村人

SOME LINKS OF MERCHANTS AND VILLAGERS IN THE MARKET OF KOSUGE VILLAGE IN THE EARLY MODERN

Shigeo HOYANO, Toshikazu TSUCHIMOTO and Shigeru OKAMOTO

The paper traces some links of the merchants and the villagers via the market held in Kosuge village in the early modern. Sheds were temporarily arranged by the villagers and used by the merchants. The villagers owned the frames of the sheds and built up the sheds during the market days, while the merchants lodged and paid money to the villagers. The sheds for the market were the artifacts that were supplied for the merchants by the villagers. The market in the village were open to the public including the villagers and the merchants only during the market days.

Keywords: Kosuge, Takai, liyama, market, shops in the market, sheds (koya)

以上をふまえ、本論は、小菅区に保存されている史料にもとづき、市店の小屋掛けの具体的な姿を捉え、近世小菅村の市立てについて考察を行う。

1-2. 小菅市の概要

小菅区は、小菅山の縄野に立地する中山間集落である。中世には、小菅山八所大権現（現在の小菅神社）の別当寺大願寺を中心に、修験の霊場として栄えたと伝えられており、「信州高井郡小菅山元隆寺之圖永禄九年」とある小菅区別当寺大願寺の地図が遺されており、隆盛を示すこの姿は、川中島合戦の頃と伝えられる。小菅山の奥に懸けつられた奥社を残し、ここごとく消失したという【注6】。その後、慶長9年（1604）、大久保氏見守る信長が社領60石を小菅山八所権現に寄与したことによって大願寺が復興したもの【注7】、修験の霊場として栄えた旧顕をと戻することはなかった。宝暦4年（1754）の村明細帳によれば【注8】、小菅村は、村高376石、戸数90戸の農村であった。このとき、大願寺の別当は、社領79石を支配し、18戸の社領百姓を抱える小領主であった。

現在、小菅区には、奥社（国指定重要文化財）や護摩壇、講堂、里社、仁王門など、神仏習合の建築遺構や、桂枝束灯神事（県指定無形民俗文化財）とされる修験の祭礼が伝わられている。

小菅市は、明治初頭に廃市となるまで、この祭礼にあわせて開か

【カテゴリーI】

1. はじめに

1-1. 研究の目的と方法

本研究の目的は、市町の場において、土地と建物の関係を歴史的に考察することにある。とりわけ、本論は、近世小菅村（現在の長野県飯山市瑞穂地区小菅区）の市を考察の対象とする【注1】。以下、本論では、この市を「小菅市」と呼ぶ。

小菅市には、数多くの市店がたちならんでいたと伝えられている。その建物は、市立てのたびに組み立てられ、市が終わると解体されたという。この場合、市中に市店の建物がならぶ明治は、市店の建物を組み立て、という建築のいとみに応じる。小菅市では、このいとみを「小屋掛け」といった。

小菅市の市店のように、市日に限って組み立てられた仮設的な市店について、板井英治は、「『雑誌はどういう用材、材料できている、その材料はどこから選んぐのか』と問題を提起した【注2】。この問いかけは、もっぱら中世の市を対象としたものであったが、近世の市についても同様に、「商人が農村の用材を毎回させると見当てにくいとも思いませんので、そういう用材が農家に保存されていた可能性も考えてみた」と指摘した【注3】。これらの指摘は、仮設的な市店の建物が市場にたちならぶ背景、すなわち、市店の小屋掛けに関する建築的検討が、中近世を通じて重ねられてきたことを示唆している【注4】。
近在の史料，是人 tai の史実で，近在の史料は，小菅市として，近在に名高く，てて明治に至たり。小菅市で今でもきる小菅市騒囃子の住者で，住居をとしたことがある。また，宝暦4年（1754）の村明細帳には

史料a 宝暦4年（1754）「信州高井郡小菅村村差出覚書」(10)
史料b 明治3年（1870）「御御祭礼日中村定連判帳」(11)
史料c 天明3年（1783）「御御祭礼日中村定連判帳」(12)

2. 近世小菅村に関する史料

小菅区に保管されている史料群から，小菅市に関する古文書と古絵図を発見した。これにより，これらの史料を紹介する。

「御御祭礼日中村定連判帳（史料b）」は，天明3年（1783）に記された市場の取り決めに関する連判帳である。取り決めは，「市内見世，「茶屋」，「内見世」とよばれた市町の記録がある。以下に全文を記す。

史料b 天明3年（1783）「御御祭礼日中村定連判帳」
「御祭礼日市中村定連判帳（史料c-1）」に加えて、3枚の古絵図（史料c-1～c-3）を発見した。これらの古絵図（史料c-1～c-3）は、どれも同じ構図で描かれており、中央に講堂、西側に寄屋の参道、東側に御旅所と蓮池、南側に奥社への参道が描かれている。さらに、奥社への参道の両側には、人名が記載された民家が描かれている。この人名を小菅村の人名帳と照らし合わせた結果[13]、近世後期の小菅村の村名と合致した。したがって、3枚の古絵図（史料c-1～c-3）は、近世後期に描かれたと判断できる。[史料c-1] 1年不詳「絵図講堂甲」[13]（写真1・図1）

小菅村の人名が記載されている[14]。これに加え、「高見世間口六尺奥行九尺」、「是迄高見世」、「是迄ひさや」、「幸八きど見世」などの記述がみえる。これらは、「見世」という文言を含んでいることから、小菅村に関する記述と考えられ、「高見世」、「ひさや」、「きど見世」は、市店の呼称であろう。[史料c-2] 1年不詳「絵図講堂乙」[15]（写真2・図2）

「絵図講堂甲（史料c-1）」で小菅村の人名が記載されている箇所に枠が描かれている。講堂の周りに描かれた枠には、「飛きや」と付記されている。「飛きや」は、「絵図講堂甲（史料c-1）」にみえる「ひさや」に対応するだろう。一方、講堂の南側に描かれた枠には、「高見世」と付記されている。これらの枠は、「飛きや」との設置場所を描いたものと考えられる。また、中央に記された「定方」には、「高見世」、「飛きや」の規模について、高見世寄前間口六尺 奥行九尺、「飛きや寄前」間口武間 奥行武間」である。

3. 近世小菅市の市店

「御祭礼日市中村定連判帳（史料c-1）」には、「本見世」、「茶屋」、「内見世」とよばれた市店の記述がある。一方、古絵図（史料c-1～c-3）には、「高見世」、「飛きや」、「きど見世」とよばれた市店の描かれたものがある。本章では、これらの市店の関係を詳細に把握する。

3-1. 本見世と高見世

本見世は、「御祭礼日市中村定連判帳（史料c-1）」をみると、「本見世」でも「内見世」では、「赤物」や「小間物」の名が使われていたことがある。なかでも、「御祭礼日市中村定連判帳（史料c-1～c-3）」に「本見世」について詳細な記述があり、これによると、「本見世」は、講堂の南側に寄せて99軒まで構えることが許されていた。

高見世は、「絵図講堂乙（史料c-2）」の「定方」として、「高見世」の規模は、1軒あたり間口1間 奥行1間半であった。また、「絵図講堂乙（史料c-2）」には、講堂の南側に「高見世」の設置場所を示す枠が99軒描かれている。

「本見世」と「高見世」を比べると、「御祭礼日市中村定連判帳（史料c-1）」における「本見世」の記述と、古絵図（史料c-1～c-3）に
ある「高見世」の描写が一致することから、「本見世」と「高見世」は、同一の市店であったと考えられる。つまり、「本見世」と「高見世」は、同じ市店をさし、1軒あたり間口1間×奥行1間半の規模で、講堂の境内に99軒まで構えることのできる仮設的な市店であったといえる。

3-2. 茶屋と飛さや
茶屋：「御祭礼日中村定軍講試（史料b-下株）」とみる、「茶屋」では、「館」や「酒」などの用意も行われていたことがある。なかでも、「御祭礼日中村定軍講試（史料b-下株）」に、「茶屋」について詳細な記述があり、これによると、「茶屋」は、講堂の東西に1列ずつ、50軒まで構えることが許されていた。

飛さや：「絵図講堂乙（史料c-2）」の「定方」によると、「茶屋」の規模は、1軒あたり間口2間×奥行2間であった。また、「絵図講堂丙（史料c-3）」には、講堂の周りに「飛さや」の設置場所を示す枠が48個（空白部分を含めると50個か）描かれている。

「茶屋」と「飛さや」を比べると、「御祭礼日中村定軍講試（史料b-下株）」に「茶屋」に関する記述と、古絵図（史料c-1～c-3）の「飛さや」に関する描写が一致することから、「茶屋」と「飛さや」は、同一の市店であったと考えられる。つまり、「茶屋」と「飛さや」は、同じ市店をさし、1軒あたり間口2間×奥行2間の規模で、講堂の境内に50軒まで構えることができる仮設的な市店であったといえる。

3-3. 内見世
「内見世」に関する記述は、「御祭礼日中村定軍講試（史料b-下株）」において内見世は区別され、小屋屋敷は共有して販売される事例を示すとある。この様にして、内見世は、地元の町屋を用いてそれぞれ区別され、市場の役目を果たしていたことが理解できる。

岡村治は、「内見世と前見世、そして定見世は、市場に面する屋敷の内を利用して出荷する見世を指していた。「内見世」と前見世の地区別はいまのところ明らかに明確な事例は検出しえないが、前者は屋敷内の表面数を借りて見世を設けるケースも含み、後者は屋敷先の市場の部分の見世に限定される」と内見世を位置づけている。この解釈を具体的に示す研究として、会津地方の町屋を対象とした宮本雅明と中川等の成果がある。宮本・中川は、「町風俗史—大町の「市場之定」にあたる「一 町市観内見世へ、店主名所江取市店へ、店主と当町之肝敷半分分分会所取来換」という記述を参照しながら、「内見世は店主が店舗を取るわけだから、屋敷先の市町に存在した店」と位置づけている。いずれの研究も、「内見世」を屋敷内に設けた商いの場と位置づけている。

これらの解釈と合致するように、天保十年（1830-1844）に記された「信満奇勝録」の「小倉の項には、「例祭日六月四日より十一日まで毎間市をなす。所の商人間業をかと混流製品の倉開け日々頃は寂しき御地も急し繁華の街となり住戸繁栄とし

以上の記述は、所有者の方に対する利益を考慮した者が示した。
3-4. きど見世
「図絵講堂 甲（表4-1）に、『幸八きど見世』という記述がある。この記述は、民家の絵に付記されていることから、『きど見世』と『内見世』の関連を感じることができる。しかし、この記述の他に『きど見世』に関する史料を確認できず、また、既往研究も管見の限り確認できない。そのため、主論では、『きど見世』の解釈を留保する。

4. 市店の小屋掛け
小菅市には、「本見世」ないし「高見世」、「茶屋」ないし「飛ざや」、「内見世」、「きど見世」とよばれる市店が設けていた。このうち、「本見世」ないし「高見世」と「茶屋」ないし「飛ざや」は、講堂の境内に構える仮設的な市店であった。これらの仮設的な市店に関する興味深い記述が「小菅奥院奥天正以来修覆記録並御馬頭観音由来（史料の）」にある。

史料の 享保14年（1729年）「小菅奥院奥天正以来修覆記録並御馬頭観音由来」[24]（表5）小菅奥院修覆
享保八年四月十六日大工始作同年九月二日事端消大工銘刻高田大戸
町松重安作（表4-1）に、『幸八きど見世』などと記載されている。

この史料は、享保14年（1729年）に大聖院の別当が頼願仏像などの記録を編纂したものである。このうち、「小菅奥院修覆（史料の）新第3）」には、享保8年（1723年）に行われた奥社修繕の費用を事務出たために、費用的一部分を『見世飛ざやそ一軒』に対する賦税によって賄われること、また、残りの費用を『外装者』他者村の氏子からの寄進によって賄われていたことが記されている。そこで注目すべきは、「見世飛ざや」を構える者と「外装者」が明確に区分されている点である。これにみえる『見世飛ざや』は、仮設的な市店、すなわち、「本見世」ないし「高見世」と「茶屋」ないし「飛ざや」をさすだろう。これらの市店は、誰が、どのようにして構えていたのか。
この問い合わせは、ストラスブルク国際裁判所が提起した案件に端を発しています。1947年（昭和22年）に設立されたこの裁判所は、戦争による損害に対する賠償を扱う国際裁判機関であり、個々の個人や法人が国際法違反を控訴する場でした。

1945年（昭和20年）の総会において、国際法の保護の必要性を認識し、新体制を整備するための組織を設けた国際会議が開催されました。この会議の結果、「国際請求権」が発足し、これが国際法違反にに基づく賠償を求めるための新しい場面を創設しました。

国際請求権は、個人や法人が国際法の違反によって生じた損害を申し立てることができる新しい機関で、国際法の遵守と国際法違反に対する追及を可能にしました。

国際請求権の役割は、国際法違反を防ぐための最後の手段であり、国際法の遵守を強化するための重要な役割を果たしています。このため、国際請求権は国際法の遵守と国際法違反に対する追及を可能にしました。
普段から「見世物」を行っている者を例外として、小菅村の外での商いは、固く禁じられていた。さらに、「道端」に持ちいれた商い、許可なく「軒小屋」などの建物を構えて、商いの場を続けることも禁じられていた。したがって、小菅村における商いの場は、村の内に設けられる市場の建物の内部に限定されていたといえる。

6. 結論

以上の事柄は、商品を携えて市場へやってきた商人の姿と、建物の一部を一時的に商へ貸与していた村人の姿をも含む。市場のすべてを商人が独占していたのではなかった。市場を形成するものの多くは、村に常住する村人の側にあった。この姿をもつ小菅村の市立では、村内の創建の一部を、一時的に外へと開くとみなされえたといえる。

本論をまとめるとあたり、飯田市教育委員会の望月秀雄氏、小菅美術協会名誉会長の蒲原良典氏をはじめ、小菅村美術館協力会、小菅村の方々には、多大なご協力をいただきました。また、信州大学文学部藤本正教教授、信州大学農学部野木本邦教授からは、多くのご教示をいただきました。末尾ながら謝意を申し上げます。

注

1) 小菅区に関する報告書や日本として、飯田市教育委員会「長野県飯田市小菅区域調査報告書-内陸地域発掘調査報告-第1章-概要編-」(2005年)、飯田市教育委員会「長野県飯田市小菅区域調査報告書-市内発掘調査報告-第2章-調査報告編-」(2005年)、信州大学・飯田市小菅研究グループ編「長野県小菅の地域文化(しなのきなし、1985年)、菅本正教監製「移転の里奥小菅村移転村と飯田」(おばきすし書房、2003年)がある。

2) 鳥井英治「市と都市」(中世都市研究会編「中世都市史研究3」新人物往来社、117-119頁、1996年)117頁引用。

3) 注1) 鳥井「小菅村と都市」(138頁引用)。

4) 市田に由来する研究として、保田友三「市の「屋根・屋根」(高橋康夫・吉野智編「日本都市史入門」人)東京大学出版会、256-257頁、1990年)、鳥井英治「市と都市下」(高橋雄夫・吉野智編「日本都市史入門」人)東京大学出版会、254-255頁、1990年)、朝尾伸「村と町から町(明)へ(新尾伸弘)」(野巻英夫・山口浩子編「日本のことす・社会的諸問題」岩波書店、323-351頁、1988年)、土木本正教「むすび小菅」(『中世都市史研究』東京中央公論出版、2-8頁、2003年)、杉森玲子「近世期における地方都市」(都市史研究会編「年20史研究会4」山川出版社、17-31頁、1996年)、藤田新司「日本中世における市と市場」(日本歴史博物館開館記念誌)67、159-176頁、1996年)、鯨井紀子「近世期における市場と古見小菅・川山内村外経済を中心に」(『歴史地理学』214、32-46頁、2003年)などがある。

5) 「信州高野小菅村史」小菅村(元禄9年)、(縮年9年1566年、小菅村が村)も、「小菅村略記(元禄18年)」(「小菅村史」から、小菅の碑文や、形態の変化を示すことが小さい。

6) 田中利満「重要有形文化財に指定された小菅村(「上原家史料」、信州地方史資料第12号、525-528頁、1958年)に、『「信州国志』(1994年)54頁引用。}

7) 鳥井英治「小菅村の小菅村(小菅村の歴史)」(慶長10年(1604)、小菅村史)引用)。